甲信地區現代俳句協会会報
No. 98

第二十四回紙上句会結果発表

秋尾　敏選

（敬称略・順不同）

特　選

蟬の去り己を探すごとき木よ　原田宏子

入　選

鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子

銀蠅の正直さうな歩みかな　上村敦子

佳　作

夏立つや木馬の口の動き出す　伊藤　翠

生まれ日の近き父母星祭　小伊藤美保子

ダ・ヴィンチといふ薔薇芯に鉄の日矢　篠遠良子

青嵐根こそぎ森を騒がせて　宮澤繁子

ひくひくと引くなめくじの這った痕　河西志帆

落し文解けば兜太の伝言よ　中村和代

箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子

父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和

晩夏光流離の研ぎしシーグラス　岩井かりん

八月やマンゴー色の灯が点り　一志貴美子

【選評】

特選句〈蟬の去り己を探すごとき木よ〉は、そのままの景としてもおもしろく、また人生の象徴とも読めて感心した。蟬の喧噪に包まれていた木は、それが自己のアイデンティティーとなっている様であったが、鳴き声がなくなると、さて自分の存在とは何であったかと途方に暮れているというのである。例えば子離れとか、孫が帰ったあとの家の静けさというようなことも連想させる。アイデンティティーは他者との関わりにあるという哲学も読み取れる。

入選の〈鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌〉は、沖縄という存在の長い歴史をよく理解しての句と思う。〈銀蠅の正直さうな歩みかな〉は

当地区協会本年度の事業計画にありました第29回吟行会は、新型コロナウイルスの感染状況を踏まえ中止することにいたしました。何とぞご了承くださいますようお願いいたします。

月並調の言い回しだが、「銀蠅」が圧倒的に利いている。立派なのか嫌われものなのかよく分からない「銀蠅」という名称のイメージを、「正直さう」がすべてひっくり返している。

大井恒行選

特　選

箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子

入　選

夏祓森に木の声鳥の声　関　道子
麦星の光の雫飲み干さむ　岩井かりん

佳　作

核の世を生き抜く子等へ虹二重　中村和代
遮断機を通り抜けたり青田風　古畑　和
ハイカラも蛮カラも来て夏マスク　海野恵子
木曽馬に名前美代香代遠郭公　篠田洋子
滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子
草引くやわが心象の庭の荒れ　依田ひろ
父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和
東京五輪はじまる世界地図買ひに　島田洋子
天龍川は壮年の川晩夏光　酒井和子
沈香はこの地の中やハンモック　山本佑子

【選評】

選んだどの句も、それぞれに趣が違い、甲乙をつけがたい。特選にした句の「箱庭に」は、もはや脳裏に刻まれた記憶の光景の謂いではなかろうか。でなければ、もともとが、山水、名勝地を模した風流の慰みであった「箱庭」に、わざわざ戦場という宇宙を映し出すことはしない、といささか勝手な読みをしてみた。「箱庭」が歳時記的に夏のものであれば、なお、そこに込められた戦場の光景は様々な思いを喚起させる。

入選句の「夏祓」、茅の輪のある神社は、鬱蒼と木の精霊や鳥の精霊に抱かれているのではなかろうか。また、形代を流していれば、そこには水の精霊も加わっているにちがいない。同じく入選句、「麦星」を「さみだれぼし」と呼ぶ地方もあるらしい。梅雨の晴間に輝く星の光には、もうすぐ来るだろう夏の強い光の雫がすでに宿っている。その雫を糧に麥も熟れる。

神野紗希選

特　選

風草のささやきばかり君の死後　小林貴子

入　選

丸めむとして白玉のとがりたる　上村敦子
八月やマンゴー色の灯が点り　一志貴美子

佳　作

濃紫陽花はつかな錆を閉じ込めし　永田エセ子
五月闇きしむ団地の凭れあい　本田幸達
文一通もちて高きに登りけり　国見敏子
息溜めて吹く仙人掌の花の塵　辰野利彦
梅雨の木に蝶あつまりぬ黄の多く　城取信平
半地下の茶房の窓辺貝風鈴　黒沢孝子
団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和
うつむけどあふむけど皆ひまはりよ　篠遠良子
銀蠅の正直さうな歩みかな　上村敦子
書斎から見る十薬の花の数　辰野利彦

【選評】

特選〈風草のささやきばかり君の死後〉、生活圏のそこここに揺れる風知草は、君を失った悲しみや魂となった君の気配を、さわさわと伝えている。喪失後の日常の切なさが、言葉の隅の隅までゆきわたる。

入選〈丸めむとして白玉のとがりたる〉、手の中で形を変える白玉の柔らかさの程度が、臨場感たっぷりに写し取られた。尖ってしまった白玉も、手作りならではのフォルムで愛おしい。〈八月やマンゴー色の灯が点り〉、八月の暑さの中で、ねっとりと点る灯。マンゴーの比喩により、暑さと粘度が引き出された。八月のもつ戦争の記憶は、金子兜太がトラック島で詠んだ〈犬は海を少年はマンゴーの森を見る〉なども思い出させる。

風草、白玉、町の灯。コロナ禍で窮屈な日々を過ごしているからこそ、その日常の中に息づいているささやかな世界の揺らぎを、見逃さず敏感に捉えた言葉に惹かれた。

宮坂静生選

特　選

変りゆく己が顔梅雨穂草　堤　保徳

入　選

泉の底は深く渦巻く曼陀羅ぞ　矢島　恵
青あらし修羅のちまたのラオコーン　海野良三

佳　作

濃紫陽花はつかな錆を閉じ込めし　永田エセ子
夏立つや木馬の口の動き出す　伊藤　翠
熊蟬や狭き地下壕司令室　大野今朝子
ダ・ヴィンチといふ薔薇芯に鉄の日矢　篠遠良子
若葉道身内に夫をひた歩む　熊井みつ子
川床涼みさすつて狎らす膝頭　一條友子
横臥の身浮くかに宵の雨蛙　宮坂市子
老いてなほ滾るものあり花さびた　阿部萌子
身を捨てて増える煌めき星祭　荻原昭廣
八月やマンゴー色の灯が点り　一志貴美子

【選評】

齢をとるにしたがい顔が変わる。かなしいことだ。しかし、梅雨の頃半年で穂を付ける草の結実の季語をとり合わせることで、かならずしも齢にしたがい顔付が変わるとは受けとっていない。内心、ひそかにおのれの充足を意識した一句と読める。手応えある一句と思う。

他に、泉の底に渦巻く曼陀羅を想像した作にも共感した。大沼の泉であろうか。古来龍がひそむ伝承も思われ、民話を生かしたダイナミックな作とみた。ラオコーンのトロイ戦争を背景にしたこれもスケールが大きな作。青あらしが自然の威力を示し、堂々たる歴史神話の一面をほうふつとさせる。

「身を捨てて増える煌めき」「濃紫陽花」の錆の句にも共感した。

城取信平選

特　選

鵯鳴くやとりとめもなき自画自讃　高橋佳世子

入　選

木曽馬に名前美代香代遠郭公　篠田洋子
蟬の去り己を探すごとき木よ　原田宏子

佳　作

風鈴鳴って思い出ひとつ浮かびたる　小澤　渓
ウイルスも生き残りかけ青嵐　三石なるみ
梅雨の月サーカス小屋の白々と　長島　環
揚花火終はりて川の流れ出す　窪田英治
籐寝椅子薄れる記憶揺らしをる　小熊里利
楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美
滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子
鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子
うつむけどあふむけど皆ひまはりよ　篠遠良子
今日ひと日火を使はずよ濃紫陽花　柳澤和子

【選評】

特選句によせて

亡くなる一年ほど前、千曲山人さんの案内で高山村の山田牧場に、とらつぐみの声を聞きに行ったことがある。夜の九時ころ牧場で星を仰いでいるとき、谷底から〝ひいいひいい〟という声が聞え、私達は感動した。

掲句を拝読したとき、自画自讃はあの夜聞いた私の心と同じであろうと思えた。鵯（ぬえ）はとらつぐみの異称である。当時、とらつぐみが県内に住んでいるのは、ここと戸隠だけと言われていた。

中澤康人選

特　選

論語食らひ頭でつかの紙魚走る　宮坂　碧

入　選

揚花火終はりて川の流れ出す　窪田英治
風草のささやきばかり君の死後　小林貴子

佳　作

白桔梗ふふむは言葉溜めてをり　吉池史江
兜虫星の欠片となりて飛ぶ　西村はる美
あめんぼの龍宮城へ潜る夢　吉松宣子
籐寝椅子薄れる記憶揺らしをる　小熊里利
梅雨の木に蝶あつまりぬ黄の多く　城取信平
パステル画のやうな睡蓮朝が来て　永田エセ子
楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美
滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子
墓原は一段高し麦を刈る　国見敏子
鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子

【選評】

論語食らひ頭でつかの紙魚走る

いかにも古書を引き出して虫干しをユーモラスにまとめた手腕を買った。しかも頭でっかちの〝論語読みの論語知らず〟を思わせて蓼食う虫も好き好きとも思える。コロナ自粛でのひきこもりはこんな発想を作り出すこともあるのだと楽しむことができた。

揚花火終はりて川の流れ出す
川は止まっている筈もないが、花火の瞬時の華美を印象づける情景がはっきり見える。

風草のささやきばかり君の死後
君の死後の空虚感をそこはかとなく漂わせて哀感をうまく表わした。風草とは風知草としていただいた。

佐藤文子選

特　選

滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子

入　選

大牛と闘う女紅い夏　冨岡詔子
梅雨寒や捨て猫を見に戻る道　荻上憲治

佳　作

蝙蝠のむくろの多し時の疫(え)よ　宮坂静生
風鈴鳴って思い出ひとつ浮かびたる　小澤　渓
夏立つや木馬の口の動き出す　伊藤　翠
アリバイの崩れ百合の香纏いつく　伊藤みち子
消しゴムの屑胸に散る陽炎　山本佑子
地震の地の深き虚よ苔の花　根橋久子
青嵐根こそぎ森を騒がせて　宮澤繁子
もしや君私が好きか心太　篠遠早紀
鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子
老いてなほ滾るものあり花さびた　阿部萌子

【選評】

特選句、東山魁夷の絵を彷彿とさせる句である。山の奥の森に囲まれた一縷の白い滝が流れ落ちてゆく。沈黙の森も滝の音に目覚め何かを言いたげに、暗かった森も仄々と明るくなってゆく。〈黙を解く〉に凝縮されている。

入選句の一。夏は「朱夏」ともいわれるように紅いイメージがあり、平凡な表現となった。が、女性闘牛士の熱情は、辺りを真っ赤に燃え立たせる。入選句の二、〈梅雨寒〉。作品には人柄が出る。作者はとてもやさしい。捨て猫に遭遇して、そのまま通り過ぎたものの気になって戻ったという。が、拾って帰ったかは、読者に任せられている。

小林貴子選

特　選

箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子

入　選

このごろよ首のうしろのいやな汗　河西志帆
泉の底は深く渦巻く曼陀羅ぞ　矢島　恵

佳　作

蝙蝠のむくろの多し時の疫(え)よ　宮坂静生
肝つ玉据ゑてかかれと羽抜鶏　長崎玲子
熊蟬や狭き地下壕司令室　大野今朝子
文一通もちて高きに登りけり　国見敏子
魚の頭を断つや八月十五日　原田宏子
大牛と闘う女紅い夏　冨岡詔子
楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美
青葡萄今日も歴史は創らるる　中澤康人
父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和
蟬の去り己を探すごとき木よ　原田宏子

【選評】

箱庭に戦車も壕も傷兵も

「箱庭」が夏の季語なのは、池や流れを作ることで涼しさが味わえるからであろう。

ところが掲句は、楽しい遊びのはずの箱庭に、なぜ戦車や壕や傷兵が置かれているのだろうか。

じつは心理学には「箱庭療法」という治療法がある。箱庭に何を置くかによって、その人のその時の心理傾向が明らかになり、治療に役立つという。

ということは、掲句の箱庭を作った人物にとって、この三つのアイテムは自己の心理の中枢に位置していることになり、戦争の記憶をぬぐい去ることができないのであろうと推測される。私の祖母も息子三人を戦争で失い、昭和四五年ころになっても、飛行機音がするだけで嫌な気持ちになると言っていた。

戦争の傷跡は深い。反戦平和を貫く道は、何も、声高に叫ぶだけではない。こうした一句を作ることもまた、大いなる足跡になる。

窪田英治選

特　選

八月やマンゴー色の灯が点り　一志貴美子

入　選

論語食らひ頭でつかの紙魚走る　宮坂　碧
箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子

佳　作

青胡桃すとんと命弾む音　根橋久子
八ヶ岳岸壁に干す登山靴　斉藤文十郎
肝つ玉据ゑてかかれと羽抜鶏　長崎玲子
丸めむとして白玉のとがりたる　上村敦子
珈琲ゼリー秘密をくづすやうに匙　一志貴美子
籐寝椅子薄れる記憶揺らしをる　小熊里利
雷を電気ギターで掻き消さむ　西澤日出樹
父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和
銀蠅の正直さうな歩みかな　上村敦子
今日ひと日火を使はずよ濃紫陽花　柳澤和子

【選評】

八月やマンゴー色の灯が点り

八月は、日本人にとって特別な月。暗い歴史を振り返る月であり、犠牲になった人々を鎮魂する月である。マンゴーは、南方の戦線を想像させるが、一方、平和な日常生活を感じさせる。マンゴーのオレンジ色の果肉のような灯は、戦後七十六年経った日本人の思いを象徴しているように思える。

論語食らひ頭でつかの紙魚走る

紙魚が論語を食べて頭でっかちになったという。思わず笑ってしまったが、現代人へのアイロニーでもあるのだろう。

箱庭に戦車も壕も傷兵も

箱庭に戦場を作るというのは、どんな心持ちからであろうか。様々な読み方ができる。

島田洋子選

特　選

八ヶ岳岸壁に干す登山靴　斉藤文十郎

入　選

卒寿まで農に生きたる麦稈帽　小澤斉子
校庭を均す球児や蚊食鳥　阿部仲童子

佳　作

巴旦杏地図の四隅に置く路傍　中澤康人
熊蟬や狭き地下壕司令室　大野今朝子
はたた神壺へ不満を吐く慣　比田井喜美子
梅雨寒や捨て猫を見に戻る道　荻上憲治
青嵐根こそぎ森を騒がせて　宮澤繁子
論語食らひ頭でつかの紙魚走る　宮坂　碧
問い掛けに農夫朗らか梅雨晴間　高山ゆう子
団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和
滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子
老いてなほ滾るものあり花さびた　阿部萌子

【選評】

八ヶ岳岸壁に干す登山靴

コロナ禍で閉じこもっている中、心が晴れ癒された句でした。道中雨に降られたのでしょうか。山小屋に着き、岩壁に干された靴に晴れた山の日差しが眩しく照り、岩壁から見渡す大きな景色がくっきりと目の前に立ち上がってきます。

卒寿まで農に生きたる麦稈帽

一読ゴッホの自画像のよう。日焼けしたお元気な姿が思い浮かび、おめでたい句です。

校庭を均す球児や蚊食鳥

蚊食鳥が飛ぶ日暮まで頑張った練習の後、心を鎮めるように土を均す球児の姿がけなげです。

久根美和子選

特　選

楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美

入　選

ブーム過ぎ高かったわと花擬宝珠　加藤律子
団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和

佳　作

青胡桃すとんと命弾む音　根橋久子
金魚には金魚の夢や面接日　篠遠早紀
かたつむりほどの歩みで今日了る　下田幼和
核の世を生き抜く子等へ虹二重　中村和代
青蛙こんな大人にならうとは　小林貴子
遮断機を通り抜けたり青田風　古畑　和
半地下の茶房の窓辺貝風鈴　黒沢孝子
箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子
父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和
沈香はこの地の中やハンモック　山本佑子

【選評】

楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく

戦争の影が日を追って濃くなっていく昭和十四年、楸邨は声に出せない一途な思いを〈蟇誰かものいへ声かぎり〉と詠んだ。戦場を体験した兜太は、終生反戦平和を詠み続けた。作者は、楸邨から兜太へ引き継がれた心の叫びを聴いている。鈍重な蟇が動かない。

ブーム過ぎ高かったわと花擬宝珠

かつて流行して高額で買ったが、今ははやらないブランドの服やバッグ。中七にため息と実感がこもる。擬宝珠の花が、ゆれやすい女心を思わせておもしろい。

団扇の手止まる打球の行方に目

助詞「の」と「に」の働きで、読み手も動きに引き込まれていく臨場感に惹かれる。

古畑　和選

特　選

楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美

入　選

珈琲ゼリー秘密をくづすやうに匙　一志貴美子

庭に蓖麻咲きゐし覚え終戦日　酒井和子

佳　作

夏立つや木馬の口の動き出す　伊藤　翠

かたつむりほどの歩みで今日了る　下田幼和

安曇野の誇り貫く青田かな　鈴木臣和

アリバイの崩れ百合の香纏いつく　伊藤みち子

亡き母を呼び戻しては梅漬ける　島田洋子

習ふより慣れる自転車風あざみ　吉池史江

梅雨寒や捨て猫を見に戻る道　荻上憲治

もしや君私が好きか心太　篠遠早紀

団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和

鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子

【選評】

楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく

楸邨、兜太は誰もが知る偉大な俳人である。その二人の偉人と底力のある蟇の聲との取り合わせが絶妙である。

珈琲ゼリー秘密をくづすやうに匙

ガラスの器の中でふるふる揺れる珈琲ゼリーの頼りなさが秘密のくずれと相まって効果的と思う。

庭に蓖麻咲きゐし覚え終戦日

蓖麻には赤と青があり、丈は一メートルを越す。じりじり照りつける太陽の下に咲く姿は何にも喩えがたい。終戦日との強い対比が良かった。

他に「安曇野の」「亡き母を」「梅雨寒や」「鍋底を」はいずれも納得できる句。面白いのは「もしや君」で、なかなか真似の出来ない作と思う。

青木澄江選

特　選

解せず帰る医者の早口ジギタリス　荒井民子

入　選

八ヶ岳岸壁に干す登山靴　斉藤文十郎

生まれ日の近き父母星祭　小伊藤美保子

佳　作

虫時雨田舎銀座の小間物屋　阿部仲童子

サングラス外し赤子をあやしけり　古畑　和

かたつむりほどの歩みで今日了る　下田幼和

自動ドア開けば母や青時雨　五味真穂

はたた神壺へ不満を吐く慣　比田井喜美子

校庭を均す球児や蚊食鳥　阿部仲童子

半地下の茶房の窓辺貝風鈴　黒沢孝子

木曽馬に名前美代香代遠郭公　篠田洋子

墓原は一段高し麦を刈る　国見敏子

夏山の水族館に海の魚　窪田英治

【選評】

〈ジギタリス〉患者の顔も見ず、パソコンのデータを見ながらボソボソ早口で所見を述べる医師に、聞き返したくても気後れがして、また知るのが怖い病状をつきつけられるのもいやで、つい解ったふりで帰ってきてしまう、近頃ありがちな、患者のもどかしい思いが的確に表現されていて共感を覚える。ジギタリスは葉を乾燥し強心剤にする毒草なので、心臓の疾患による受診であったかもしれない。

〈登山靴〉骨太の句で気持ちがよい。干された登山靴が登山の一部始終を如実に語りだす。

〈星祭〉どちらも七夕に近い生まれ日の父と母を、彦星と織姫に重ね、自分の誕生に至るロマンに、天の川を見上げつつ浸る姿があ

りありと見えて微笑ましい。

西村はる美選

特　選

白桔梗ふふむは言葉溜めてをり　吉池史江

入　選

巴旦杏地図の四隅に置く路傍　中澤康人

今年竹大空摑むところまで　宮澤繁子

佳　作

青胡桃すとんと命弾む音　根橋久子

熊蟬や狭き地下壕司令室　大野今朝子

丸めむとして白玉のとがりたる　上村敦子

籐寝椅子薄れる記憶揺らしをる　小熊里利

人生は螺旋階段雲の峰　三石なるみ

論語食らひ頭でつかの紙魚走る　宮坂　碧

吾の腕に叩きたる蚊と我の血と　上原富子

団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和

墓原は一段高し麦を刈る　国見敏子

晩夏光流離の研ぎしシーグラス　岩井かりん

【選評】

白桔梗ふふむは言葉溜めてをり

ふっくらとした五角形の桔梗の蕾がすっと見えてくる。固く閉じられたままのその蕾は、今しきりに言葉を溜めているところだという。綻びる時には、どんな言葉を発するのであろうかとメルヘンチックな想像力が掻き立てられ、転換の巧みさに思わず引き込まれてしまった。白桔梗だからこその実感である。

巴旦杏地図の四隅に置く路傍

道端で広げた地図の四隅に、重石替りに置いたのが巴旦杏であるという意外さ。田舎道の土の香、草の香までが伝わってくるよう。

今年竹大空摑むところまで

勢いよく伸びた今年竹を見上げ、大空を摑むと把握された作者の大らかな感性が光る。

一句高点

1位　10点

箱庭に戦車も壕も傷兵も　大野今朝子

2位　9点

楸邨よ兜太よ蟇の聲ひびく　西村はる美

3位　7点

論語食らひ頭でつかの紙魚走る　宮坂　碧

滝落ちて一途に森の黙を解く　小澤斉子

八月やマンゴー色の灯が点り　一志貴美子

4位　6点

八ヶ岳岸壁に干す登山靴　斉藤文十郎

団扇の手止まる打球の行方に目　下田幼和

鍋底をとろ火のなぶる沖縄忌　久根美和子

蟬の去り己を探すごとき木よ　原田宏子

5位　5点

風草のささやきばかり君の死後　小林貴子

父の日ややさしく牙を抜く仕組み　鈴木臣和

応募数七十五名、一五〇句。

特選3点、入選2点、佳作1点で集計。

選者特選句および高点句について、それぞれ賞品を呈上いたします。なお、表彰については吟行会の席上を予定しておりましたが、吟行会が中止となりましたため、受賞各位宛に発送させていただきました。

紙上句会担当　**事務局**

‡

応募作品一人一句

（到着順）

校庭を均す球児や蚊食鳥　阿部仲童子

サングラス外し赤子をあやしけり　古畑　和

うそをつくうそもやさしさソーダ水　川久保京子

蝙蝠のむくろの多し時の疫（え）よ　宮坂静生

地震の地の深き虚よ苔の花　根橋久子

落人の墓に縋りし桐の花　城取信平

濃紫陽花はつかな錆を閉じ込めし　永田ェセ子

白波や舟遊びする同性婚　小澤　渓

深爪のギター少年木下闇　西澤日出樹

はたた神壺へ不満を吐く慣　比田井喜美子

人生は螺旋階段雲の峰　三石なるみ

離着陸の合間見計り揚雲雀　荻上憲治

茹でるほど枝豆蒼いかもしれぬ　斉藤文十郎

巡り行く道や葉ざくら天覆ふ　熊井みつ子

霾や民主化目指す象の群　松下勝昭

夏立つや木馬の口の動き出す　伊藤　翠

五月闇きしむ団地の凭れあい　本田幸達

今年竹大空摑むところまで　宮澤繁子
習ふより慣れる自転車風あざみ　吉池史江
栗の花つまらなの世となりにけり　長崎玲子
もしや君私が好きか心太　篠遠早紀
生まれ日の近き父母星祭　小伊藤美保子
青葡萄今日も歴史は創らるる　中澤康人
天道虫死んだふりして逃げおほす　上原富子
酒もよし土佐の厚切り初鰹　宮坂　碧
兜虫星の欠片となりて飛ぶ　西村はる美
不発弾探す沖縄慰霊の日　黒沢孝子
住宅地攻める如くに田水張る　樋上照男
問い掛けに農夫朗らか梅雨晴間　高山ゆう子
口角を上げる練習梅雨曇　久保井理緒
慰霊の日少女平和を絶唱す　篠田洋子
かたつむりほどの歩みで今日了る　下田幼和
卒寿まで農に生きたる麦稈帽　小澤斉子
手遊びのウクレレ爪弾く短夜　清水恵子
大ひまはり天の青さを妬みをり　佐藤文子
熊蟬や狭き地下壕司令室　大野今朝子
川床涼みさすつて狎らす膝頭　一條友子
核の世を生き抜く子等へ虹二重　中村和代
このごろよ首のうしろのいやな汗　河西志帆
夕立過ぐ胸に明るき穴ひとつ　海野恵子
細き糸恃みに毛虫ゆらりゆらり　関　道子
文一通もちて高きに登りけり　国見敏子
あめんぼの龍宮城へ潜る夢　吉松宣子
恙無くめぐる七曜立葵　久根美和子
進みゆく玉（ぎょく）の衣や大毛虫　加藤律子
ワルツからタンゴへ走り梅雨の音　宮坂市子
少数派なりふぞろひの胡瓜買ふ　依田ひろ

梅雨の月サーカス小屋の白々と　長島　環
腮を伸ばしゆやけの青田道　伊藤美恵
半夏生草もう母にならぬ猫　五味真穂
遅れ来て笹百合一枝差し出す児　阿部萌子
魚の頭を断つや八月十五日　原田宏子
安曇野の誇り貫く青田かな　鈴木臣和
うつむけどあふむけど皆ひまはりよ　篠遠良子
松蟬や弓道場は息ころし　荒井民子
青蛙こんな大人にならうとは　小林貴子
半夏雨石牟礼道子身近に居　高橋佳世子
枷解かれ土に還りし夏椿　伊藤みち子
樹幹流の跡のつばらか苔の花　海野良三
銀蠅の正直さうな歩みかな　上村敦子
幾日も夕日を見ずよ小暑過ぐ　柳澤和子
夏山の水族館に海の魚　窪田英治
雲海に立ち上がる嶽覇者のごと　矢島　恵
娘なき妻抱へ来る青鬼灯　松澤あきら
珈琲ゼリー秘密をくづすやうに匙　一志貴美子
息溜めて吹く仙人掌の花の塵　辰野利彦
晩夏光流離の研ぎしシーグラス　岩井かりん
コロナ禍と異常気象に呆（ほ）ける夏　冨岡詔子
翡翠の蓮華座誕生日祝ひ　小熊里利
笑ひ声幾日ぶりや梅雨茸　堤　保徳
亡き母を呼び戻しては梅漬ける　島田洋子
炎天下伝統にスパイスを振る　野々風子
身を捨てて増える煌めき星祭　荻原昭廣
沈香はこの地の中やハンモック　山本佑子
天龍川は壮年の川晩夏光　酒井和子

▼会員動向（令和三年度後期入会）
本多独川（どくせん）（長野市）梟
会員数（R3・9・15現在）一三五名

▼会費納入について
本年度地区協会費を未納の方に振替用紙を同封しました。速やかにお払込みください。

▼後記
コロナ禍のもと、昨年に引き続き今年度も吟行会が開ける状況には至りませんでした。唯一の事業として通信による紙上句会が行われ、結果を本号に掲載いたしました。
ご投句いただいた会員各位、暑中選句の任に当たられた各位に厚く御礼申し上げます。各選者の選句・選評を熟読し、会員の応募作品を味わっていただければ幸いです。
紫陽花に秋冷いたる信濃かな　杉田久女
季節が移ろいます。皆さまどうぞご自愛くださいますように。
（一志）

会　報　第98号
令和3年9月15日発行
甲信地区現代俳句協会
発行人　佐藤文子
編集人　窪田英治
事務局　〒389-0406
東御市八重原900-1
TEL（0268）67-3364
郵便振替口座　00520-0-34872
甲信地区現代俳句協会
印刷所　双葉印刷有限会社